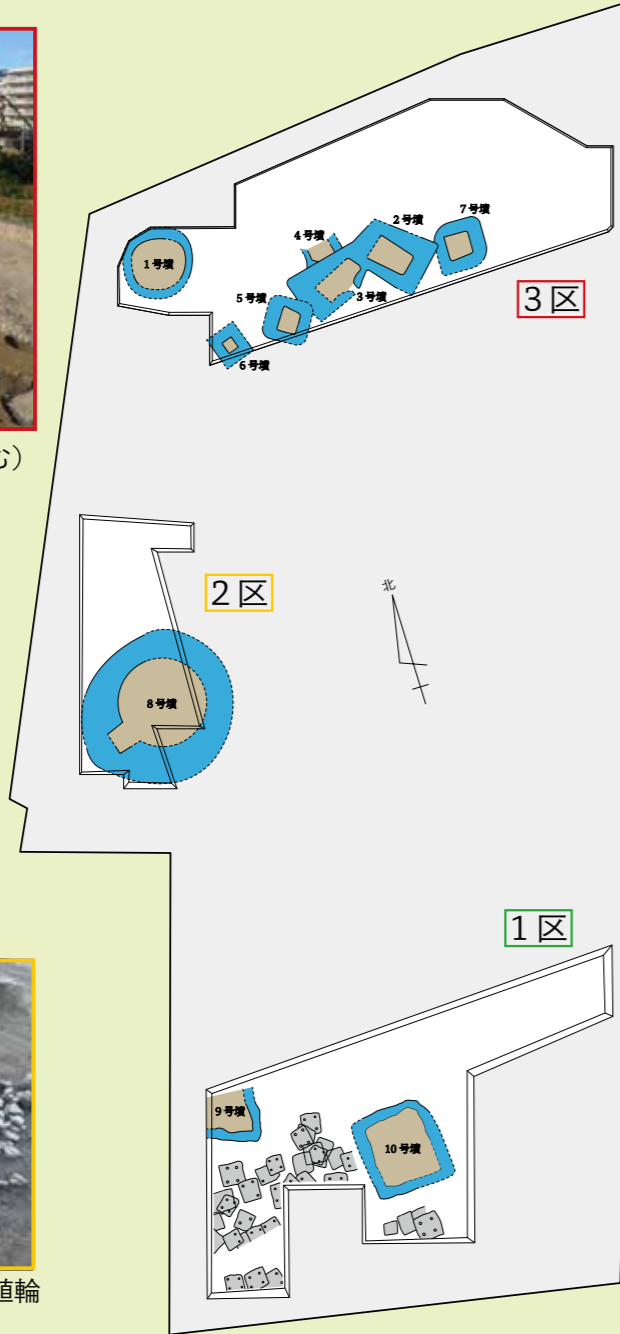




3区 古墳群遠景（東から西を望む）



1～3区下層の調査成果



3区 5号墳周濠から出土した馬の歯



3区 5号墳周濠から出土した牛の歯



1区 古墳と密集する竪穴建物群
（東から西を望む）



2区 8号墳全景（西から東を望む）



2区 8号墳くびれ部で見つかった埴輪

今回の発掘調査の結果、古墳時代から鎌倉時代にかけての多くの遺構と遺物が見つかりました。その中でも特筆すべき成果としては、古墳時代の古墳群と集落の発見が挙げられます。

古墳群は、前期（4世紀頃）の円墳1基、中期前半（5世紀前半）の方墳2基、後期後葉（6世紀後半）の円墳1基・方墳6基の計10基を検出しました。中期の古墳の周濠からは、多量の須恵器や土師器と共に**陶質土器**や鉄器が出土しました。陶質土器は朝鮮半島南部で作られた物と考えられ、これらの地域と積極的に交流を持っていたことが伺えます。後期の古墳の周濠からは、多くの埴輪が出土した他、**牛と馬の歯**が見つかりました。牛の歯が古墳から出土した事例は日本列島でも極めて少なく、今回の発見は大変重要な成果といえます。

古墳群の南側では、方形の竪穴建物を**33棟**検出しました。これらの建物は、出土土器から古墳時代中期から後期にかけての建物であると判断でき、古墳群の造られた時期と同じであると考えられます。これらのことから、この建物に住んでいた人々は、**古墳群の造墓集団**である可能性が高いです。また、これらの建物からは鉄器製作関係の遺物が多く見つかり、鉄器の製作・加工に従事していた集団が住んでいたとも考えられます。

陶質土器、牛馬の歯の出土や埋没古墳の検出は、いずれも西宮市域で初の事例であり、今回の発掘調査は西宮を含む阪神地域の歴史を考えるうえで大変貴重な成果を得たといえます。

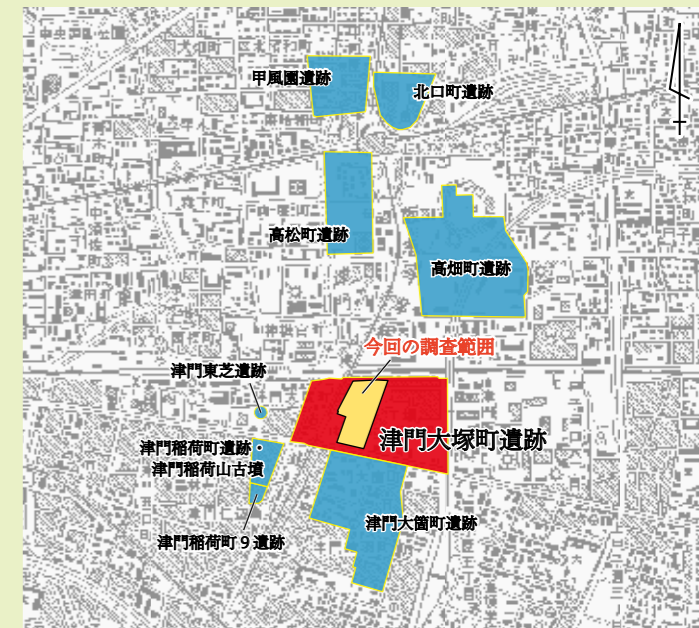


1区 10号墳の周濠から出土した多量の須恵器・土師器・陶質土器

はじめに

（公財）兵庫県まちづくり技術センターでは、兵庫県立西宮総合医療センター（仮称）整備に伴い、兵庫県教育委員会から委託を受けて、津門大塚町遺跡で調査区を3箇所（1区～3区）に分けて発掘調査を行っています。

調査の結果、上層（平安～鎌倉時代）と下層（古墳～奈良時代）で多くの遺構や遺物が見つかりました。注目できる成果としては、2・3区下層では、古墳時代後期（今から1450年前）の古墳8基と多くの埴輪や須恵器、牛馬の歯が見つかり、1区下層では古墳時代中期～後期（今から1600～1450年前）の**竪穴建物33棟**や古墳時代中期の**古墳2基**が見つかりました。1区の古墳の周濠からは、多くの須恵器や土師器と共に**陶質土器**という朝鮮半島産の土器が見つかりました。
今回の説明会では、1区下層の調査成果を中心に公開します。



津門大塚町遺跡と周辺の遺跡



1区上層の調査成果



平安時代の掘立柱建物群（北西から）



平安時代の道路状遺構（北から）

1区上層では、奈良時代から鎌倉時代にかけての掘立柱建物や井戸、木棺墓、道路状遺構を検出しました。掘立柱建物は、現在8棟見つっていますが、その他にも多くの柱穴が見つまっていることから、今後さらに増えると考えられます。調査区の中央付近では、平安時代頃の南北方向に並行する溝を検出しました。この溝と溝に挟まれた場所では、周辺と異なる固くたたき締められた土が堆積しており、**道路状遺構**の可能性が考えられます。この道路状遺構と掘立柱建物のいくつかは、南北の主軸方向を同一にしており、道路沿いに建ち並んだ中世集落を想定することができます。



10号墳周濠内から見つかった陶質土器



10号墳周濠から見つかった土器（南東から）



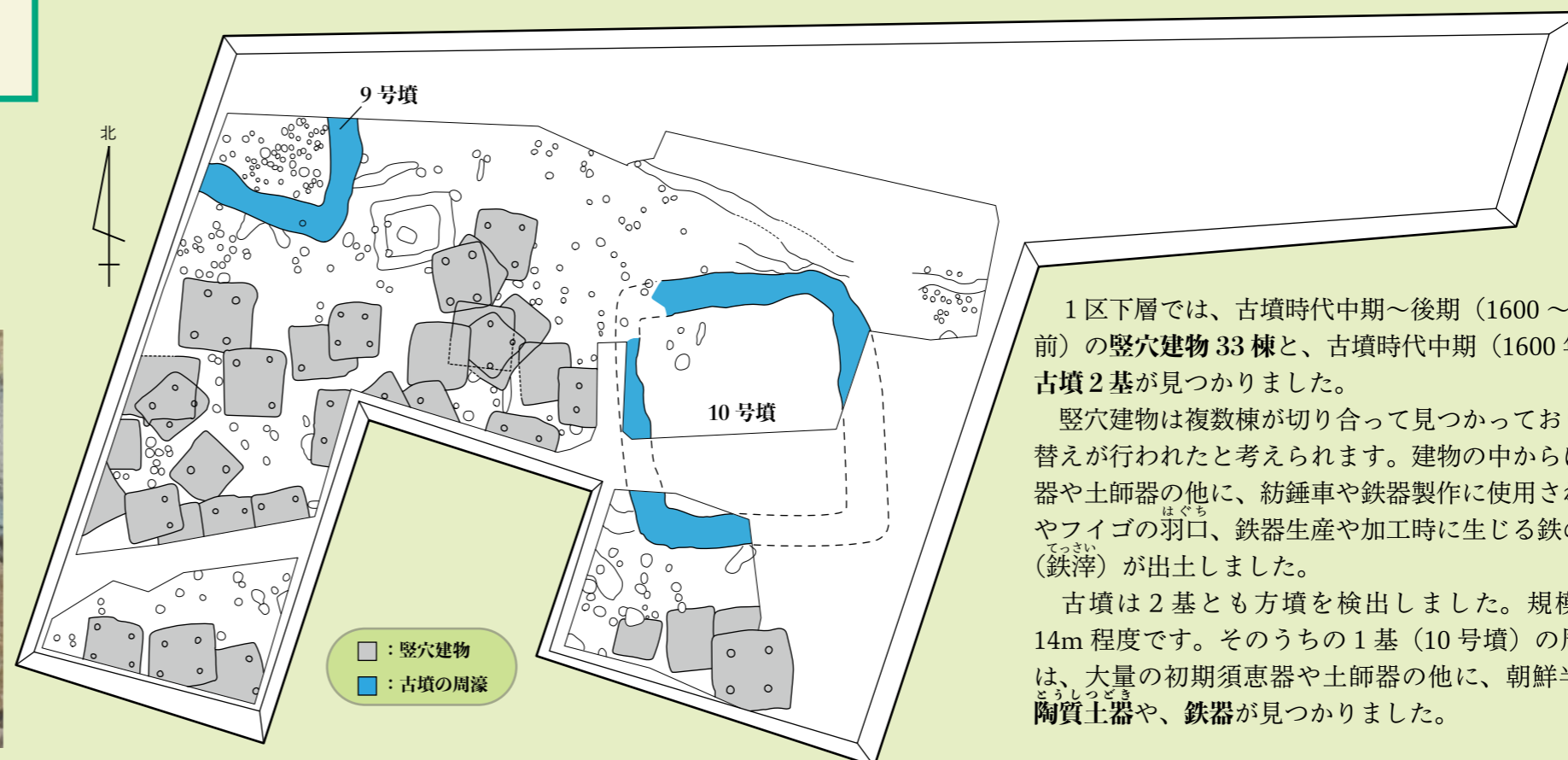
10号墳全景（北から）



竪穴建物から見つかった土器



密集する竪穴建物（北東から）



1区下層では、古墳時代中期～後期（1600～1450年前）の**竪穴建物33棟**と、古墳時代中期（1600年前）の**古墳2基**が見つかりました。

竪穴建物は複数棟が切り合っており、建て替えが行われたと考えられます。建物の中からは、須恵器や土師器の他に、紡錘車や鉄器製作に使用された砥石やファイゴの羽口、鉄器生産や加工時に生じる鉄の不純物（鉄滓）が出土しました。

古墳は2基とも方墳を検出しました。規模は一辺14m程度です。そのうちの1基（10号墳）の周濠からは、大量の初期須恵器や土師器の他に、朝鮮半島産の**陶質土器**や、**鉄器**が見つかりました。

1区下層の調査成果